

# 陳普『字義』の資料的性格 ——儒教における哲学辞典的著作の一例として——

林 文孝

## はじめに

儒教における哲学辞典的著作としては、陳淳（1159-1223）『北溪字義』が最初だという人もあれば（Tucker 1990: p. 28）、その先蹤としての程端蒙（1143-91）『性理字訓』の意義に注目する人もある（張加才 2004: pp. 128-32）<sup>1</sup>。いずれも、朱熹門下による朱子学形成史においても大きな役割を果たした書物である。これに次ぐものとして注目されるのは、中国では清代の戴震『孟子字義疏証』等、日本でもこれとほぼ同時代の伊藤仁斎『語孟字義』等と、いずれも朱子学批判の営為として提出されたものである。これらが、儒教における哲学辞典的著作、古典中国語でいう「字義」・「字訓」の書の、いわば主流である。

この見取り図を念頭に置いた時、宋元交替期福建の儒学者・陳普（1244-1315）が遺した『字義』は、ほとんど忘れられた傍流的存在である。しかし、傍流とはいえ、それが生み出された由縁や、傍流にとどまったことの原因は考察するに値する問題であろう。本稿は、このような問題を考察する準備として、『字義』の内容的特徴および受容の様相についての初歩的整理を行う。

## 1. 陳普の伝記・著作と研究状況

陳普の伝記は、よく知られた文献の中では『宋元学案』（『黄宗義全集（増訂版）』所収）巻64、『宋元学案補遺』巻64、『閩中理学淵源考』（『四庫全書』所収）巻40などに見える。

<sup>1</sup> 張加才は、朱熹作とされる「訓蒙絶句」をも『北溪字義』の理論的淵源と見ますが、偽作の疑いの存在をも考慮し、ここでは判断を保留する。またタッカーは、『性理字訓』の先駆的意義をより限定的に評価するが、その記述には後述の程若庸増広版との混同が見られる（Tucker 1990: pp. 29-30）。

古いところでは『大明一統志』巻74、『〔弘治〕八閩通誌』（『四庫全書存目叢書』所収）巻72が、四書五経を本としつつ「律呂天文地理算数之説」に精通した学風を伝えるが、いずれも「陳尚徳」と字のみで表示するなど、明初には早くも伝承の不確かな存在であったらしい。こうした趨勢を挽回すべく陳普を表彰しその遺著を蒐集したのが、関文振<sup>2</sup>なる人物である。そして、彼が蒐集して諸処に識語を付した『石堂先生遺集』22巻（以下適宜『遺集』とも称す）の附録「石堂先生伝」が、その後の伝記記述に対しても基本的な枠組みを与えている。

以下、他資料による補足を適宜加えながら関文振の伝える陳普の生涯の概要を記し、その上で現存著作と研究状況について付記する。

陳普、字尚徳、別号懼斎。寧徳石塘の人。石堂山に住んだため石堂先生と称される。

理宗の淳祐4年（1244）生まれる。朱子がこの地に儒者が生まれることを予言していた。

郷塾に入って大人の志あり、浙東会稽の韓翼甫（号恂斎）のもとに遊学。韓の学は朱熹の高弟・輔広から出る。『宋元学案』巻64によれば、韓翼甫は宋朝の朝奉郎・大理寺主簿であり、元への出仕を拒否して門を閉ざした。王梓材案語で、韓は輔広の直接の弟子ではなかろうと述べており、年代的におそらくそれが正しい。

師と同様、陳普自身も宋の滅亡に伴い隠居を決意し、元朝からの「本省教授」への招聘を拒絶して郷里で講学した。多くの弟子が集まった。

建州の劉純父から雲莊書院の主講に招かれたとき、熊禾（1253-1312：字去非、号勿軒、建陽の人、やはり輔広の学統とされる<sup>3</sup>）は鰲峰書堂で講学しており、聖賢の肖像を撤去して木主を用いるべきことで見解が一致する。丞相・劉文簡公（劉敏中）の命により「黄楊二家喪祭礼」を修訂し朱熹の解と合わせ

2 江西浮梁の人。当時寧徳県儒学訓導として『福寧州志』・『寧徳県志』の纂修にも携わり（両書とも『天一閣藏明代方志選刊統編』第41冊所収）、また陳普の門人・韓信同の『韓氏遺書』2巻をも蒐集・刊行した。そのかたわら、自身の興味により怪異記事を蒐集しており、その成果は『異物彙苑』18巻（『四庫全書存目叢書』所収）に結実している。

3 熊禾についての近年の研究としては、朱鴻林の著書に2篇の論文を収める（朱2005：20-69頁）。

て刊行した。「饒・広」（明代の区画でいう饒州府・広信府）に講じ、徳興の初庵書院にとくに長く滞在、「太極之旨」について議論を交わす。

晩年は（逆算すると1298年ごろ～）「莆中」にあること18年。門下から韓信同（1252-1332：字伯循、古遺先生と称される。福寧の人）らが出た。

関の「伝」には記述がないが、陳普には『武夷權歌註』（『佚存叢書』・『叢書集成初編』等所収）の著もあり、大徳8年（1304）、劉概による跋がある。朱熹が舟歌を真似て作った「武夷權歌十首」（『朱文公文集』巻9）の哲学的含意を注釈したものである。

『字義』一卷を著した。「字義序」によれば1305年のことである

経世の志をいだし井田実行を説く上書をしようとしたことがあるが、宋が滅亡したために果たせなかった。『遺集』巻12所収の「擬上皇帝乞行井田書」のことであろう。

元の延祐2年（1315）、72歳で家に卒した。

著書に『四書句解鈐鍵』、『学庸旨要』、『孟子纂図』（『孟子纂要』の誤りか）、『周易解』、『尚書補微』、『四書六経講義』、『渾天儀論』、『天象賦』、『詠史詩断』凡そ数百巻がある。このうち『四書六経講義』以下は『遺集』に収録されている。

泰定2年（1325）になって、門人・余載により「字義後序」が書かれている。

さて、現存の陳普の著作は、『武夷權歌註』を除けば、関文振蒐集『石堂先生遺集』22巻に収録されたものがほぼ全てといえる<sup>4</sup>。『字義』はその巻9全てを占める。

『遺集』には、日本で確認できる限り3種類の版本がある。

一つ目は、嘉靖14年（1535）序刊本（以下、「嘉靖A本」と称す）。静嘉堂文庫所蔵（15函9架）。毎半葉10行22字。四周単辺、有界。白口無魚尾（二重線が上下2箇所にある）。

4 『福建朱子学』の「陳普著作簡介」（高・陳1986：201-2頁）では、『儀礼注釈』十巻、『孟子纂要』二巻、『四書集解』九巻も挙げて説明されているが、所蔵機関の記載はない。『中国古籍総目』ではこれらの書物は著録されておらず、詳細は不明である。

二つ目は、嘉靖16年(1537)序寧徳県知県程世鵬刊本(以下、「嘉靖B本」と称す)。前田育徳会(尊経閣文庫)所蔵<sup>5</sup>。本文内容は嘉靖A本と同様と思われるが、版式は毎半葉10行20字。四周単辺、有界。白口双白魚尾(上下の魚尾は逆向き。巻1の冒頭2葉のみ単魚尾)。巻末の附録に「梓集文移」が加わっている。

三つ目は、万暦3年(1575)序薛孔洵重刊本(以下、「万暦本」と称す)。『続修四庫全書』第1321冊に影印が収められた。本文部分は毎半葉10行20字、四周単辺、有界、白口単魚尾(魚尾は黑白混在、巻9はすべて白)。阮鑽序によれば、嘉靖の版木が「嘉靖辛酉之變」(嘉靖40年:1561。倭寇によるものであろう)によって焼失したため、薛孔洵が旧本をもとに注釈をも加えて重刊したもの。嘉靖間の版本に比べると俗字が多い。版式や文字異同の分布等から見て、底本は嘉靖B本であろうか。

以下、『遺集』の引用は、アクセスの容易な『続修四庫全書』所収万暦本に主として拠る。

陳普の思想については、高令印・陳其芳『福建朱子学』の概説的記述があるのみである(高・陳1986:194-202頁)。また、詠史詩に注目した専論が1篇(張高評2007)、一般向け伝記紹介記事が1篇(童2003)見いだせた。だが、『字義』に注目した論述は今までなされていないと思われる。

## 2. 『字義』の概要

本節では『字義』の概要を紹介する。まず著作の意図を把握する。次に目録と各条の字数を示す。最後に、いくつかの条を紹介して本書の内容の一斑を示す。補論として、『遺集』巻14に収める「性理字訓」上・下に関する問題点を述べる。

5『中国古籍善本総目』によれば、上海図書館所蔵本と同版かと思われる。なお、嘉靖『寧徳県志』巻4「文籍・家集」によれば、寧徳県に加えて江西・饒州府でも『石堂先生遺集』が刊行されたという。嘉靖B本は明らかに寧徳県刊であるから、嘉靖A本に相当する可能性があるが、嘉靖A本の刊記等は確認できないため推測にとどめる。

## 2.1 『字義』の著作意図

『字義』の著作意図を把握するため、陳普による自序の全文を見てみよう。

予旧嘗作韓伯循字説謂、性命道德五常誠敬等字、其在六經四書、猶斗極列宿之在天、五嶽四瀆之在地也。拳斗極列宿、則天之全体得、拳五嶽四瀆、則地之全体明。明於性命道德五常誠敬等字之義、則六經四書之全体可得而言矣。世之知書而或不明於道、不得於聖賢之心者、未明於此等字義故也。明於此等字義、則万戸千門以漸開闢、自当如寐之得醒矣。乙巳歲、樵丘叔文之仲子和仲、年十<sup>6</sup>七、從予学、每講説遇此等字、必為之深論而多言之。和仲每聞輒悚然、察其貌若有以真契默会、而自得於問答之外者、雖蒙其家学源流端的浹洽、是亦其所受於天者清厚、与等夷異故也。歲晚相別、取所論之深切簡明、足以備其義者、序列条分、并与其他工夫門路状形立的切要等語、亦為之稍抽發開析以附其後、合凡百五十三字、以授之使不忘。蓋多於程正思、而少於陳安卿者、学患不得其門耳。子其勉之。由門而堂而室、吾嘗計日而待矣。冬至前七日書。[私は昔、「韓伯循字説<sup>8</sup>」を作って以下のように述べたことがある。性・命・道・徳・五常・誠・敬等の字が六經・四書の中にある様は、ちょうど北斗や北極や諸星宿が天にあり、五岳・四瀆が地にあるようなものだ。北斗や北極や諸星宿を挙げれば天の全体が得られるし、五岳・四瀆を挙げれば地の全体が明らかになる。性・命・道・徳・五常・誠・敬等の字の意味に通暁するなら、六經・四書の全体についても語るができるようになるのだ。世間で書物のことは知っていても道について明らかでないものがあったり、聖賢の心が会得できないものがあったりするの、これらの字義に明らかでないからである。これらの字義に通暁するなら、万の戸・千の門もしだいに開かれていくこと、眠りから醒めるかのようであるに違いない。乙巳の歳（1305年）、樵の丘叔文の仲子・和仲<sup>9</sup>は、十七歳で私のもとに学んだ。講説してこれら

6 万曆本「七」に作るが、改める。「附」の対校を参照。

7 万曆本「淡」に作るが、改める。

8 現在の『遺集』には見えない。

9 李清馥『閩中理学淵源考』（『四庫全書』所収）巻40では邵武の人と判断する。「樵」が邵武の地名なのであろう。

の字に出くわすごとに、必ず深く論じ多くの説明をしてやった。和仲は聞くたびに恐れおののく様子で、その表情をよく見れば、暗黙の内に真実に合致し、問答以外のところで自得しているように思われた。自身の家学の源流が明確で浸透力があるのを受止めた結果とはいえ、やはり彼が天から受けた資質の清らかさ・厚さが、同輩とは異なっているせいでもあろう。歳末に別れるさい、論じたことの中で切実・簡明、その意味を十分完備できたものを取り上げて順番に並べ箇条に分け、あわせてその他の工夫の道筋や様子、目標や大事なポイント等の言葉を、やはり彼のために若干敷衍・解説を加えてその後に附し、合せて全部で153字として授け、忘れないようにさせた。程端蒙よりは多く陳淳よりは少ないのは、学問はその入り口が得られないことが心配だからだ。君よ、しっかり勉強して、門から広間、そこから奥の間まで進み給え。私は日数を数えて待っている。冬至の七日前に書す。】（「字義序」、『石堂先生遺集』巻9：414-5頁<sup>10</sup>）

著作意図と成立事情はこの序に尽くされている。第一に、字義に注目する意義について、陳普が非常に自覚的であったことが見て取れる。経書には他の字とは異なる重要な意義をもつ字が存在しており、その意味に通暁することによってこそ、六経・四書の全体あるいは聖賢の心への理解が開かれていくというのである。字義の学は陳普において、聖人に至るための重要な階梯と位置づけられるであろう。第二に、著述の直接の事情として、丘和仲なる門人に授けるために、彼への講義内容を基本としつつも、別の来源をもつ材料を付加して作られたことが記される。第三に、程端蒙『性理字訓』・陳淳『北溪字義』という先行著作を陳普は明確に意識しており、それらとは異なる中間的な分量を志向していることである。その理由もまた、学問の進捗に対する配慮から出ることが語られている。

こうした著作意図の思想史的意義等についてはいずれ別稿にて論じたいが、予想を含めて簡単に触れておく。まず、「太極」や「理」といった特定の概念

10 『遺集』からの引用に際しては、『統修四庫全書』第1321冊によりページを示し、特に必要な場合のみ原本の巻葉表裏を付記する。

に注目する態度それ自体は、朱子学という学問の性格に由来するであろう。それゆえにこそ、それぞれの標的に違いはあるものの、程端蒙や陳淳といった朱熹門人から、「字」を単位とする哲学辞典的著作が生み出されたのだと考えられる<sup>11</sup>。そして、陳淳の場合には字義の学が聖賢を目指す体認的理解に結びついていたことが、在来の訓詁学との大きな違いとして指摘されてもいる（張加才 2004：124-8 頁）。陳普の自序は、陳淳の場合に必ずしも明示されていなかったこうした志向性が、著作意図として自覚的に明示されている点が注目される。

門人・余載は、『字義』が得た高い評価について記す。

或者目為百五十三顆驪珠。風胡非乏巨眼。然是珠也、將照千里、奚特十二乘、顧當置之掌中、毋但買櫝云。[ある人がこれを 153 粒の黒竜領下の珠（『莊子』列禦寇による）と目したのは、刀劍鑑定家・風胡のように、巨大な鑑識眼が乏しくはない証拠だ。しかし、この珠は千里をも照らすはずのもの、車十二台分の価値にはとどまらない。掌中に置くべきものであり、箱だけ買うのではいけないというわけだ。]（余載「字義後序」、『石堂先生遺集』巻 9：430 頁）

余載は当然、箱すらも失われかける状況になろうとは想像していなかった。

## 2.2 『字義』の目録

自序にも語られるとおり、『字義』は当初 153 条だった。ところが、現行の『字義』は 140 条である<sup>12</sup>。1 条が複数字数のケースを考慮してもうまく合致しない。著作蒐集作業にあたった関文振の次の証言は、この食い違いの事情を推測させるであろう。

11 しかし、後世、朱熹高弟として黄榦と陳淳との優劣が論じられた経緯から見て、この傾向が朱子学の全てを覆うものとみることは難しいであろう。

12 嘉靖 A・B 本『遺集』巻首『目録』では、「字義」の題下に「百三十九条」との小字注があるが、本文は 140 条ある。目録の細目で第 38 条「秉彝」が脱落しており、そのまま数えて注記したものと思われる。万暦本では「目録」での条数注記はない。

予始得先生遺稿、有字義一帙、首尾壞爛、不可辨識。択其可録者、自道字始、位字止耳。餘字及先生自序・余載後序、悉缺焉。將就梓、会予属阮生鑿索韓古遺遺稿於其家、得塵本示予、則先生字義也。予喜亟翻而録之。〔私が初めて先生の遺稿を手に入れたとき、『字義』一帙が含まれていたが、首尾はボロボロで文字の見分けがつかなかった。筆写可能なものを選び分けると、「道」字から「位」字までの範囲に過ぎなかった。残りの字と先生の自序、余載の後序はすべて欠落していた。印刷に取りかかろうとした頃、たまたま私は生員の阮鑿に依頼して韓信同の遺稿をその家で搜索してもらっており、塵まみれの本を手に入れて私に示したところが、先生の『字義』であった。私は喜び、急ぎめくってそれを書き写した。〕（関文振識語、『石堂先生遺集』巻9：430頁）

韓信同旧宅から得られた「塵本」もまた、完本ではなかったのではなかろうか。

以下に、『字義』の各条に通し番号を振り、目録を示すとともに、量的な把握を試みる。（ ）内に、各条の記述の項目数（白圏の区切りによる）と全体字数（白圏含む）を示す。

- |                            |               |              |              |
|----------------------------|---------------|--------------|--------------|
| 1 天 (2/456)                | 2 太極 (1/180)  | 3 乾 (2/22)   | 4 坤 (2/21)   |
| 5 元 (1/14)                 | 6 亨 (1/13)    | 7 利 (1/19)   | 8 貞 (2/50)   |
| 9 無極 (3/131)               | 10 太和 (1/11)  | 11 皇極 (1/38) | 12 陰 (1/12)  |
| 13 陽 (1/12)                | 14 剛 (1/27)   | 15 柔 (1/32)  | 16 鬼神 (1/65) |
| 17 神妙 <sup>13</sup> (1/32) | 18 主宰 (1/28)  | 19 造化 (1/10) | 20 化工 (1/6)  |
| 21 変化 (1/28)               | 22 幽明 (1/26)  | 23 屈伸 (1/74) | 24 消息 (1/16) |
| 25 盈虚 (1/28)               | 26 感応 (2/163) | 27 孚 (1/19)  | 28 易 (1/32)  |
| 29 道 (2/138)               | 30 理 (1/25)   | 31 器 (1/14)  | 32 費隱 (1/42) |

13 本文による。嘉靖A・B本・万暦本とも目録では「妙」。後述の和刻本では「神妙」。

33 体用 (1/104)	34 徳 (1/76)	35 行 (1/6)	36 性 (2/193)
37 降衷 (1/35)	38 秉彜 (1/22)	39 命 (2/119)	40 情 (1/47)
41 心 (2/83)	42 志 (1/9)	43 意 (1/10)	44 思 (1/14)
45 思 <sup>14</sup> (1/12)	46 慮 (1/12)	47 念 (1/5)	48 才 (1/61)
49 気 (1/126)	50 五常 (1/22)	51 仁 (1/94)	52 義 (2/120)
53 礼 (1/170)	54 智 (1/13)	55 信 (1/125)	56 四端 (1/42)
57 三綱 (1/237)	58 五典 (2/144)	59 五教 (2/94)	60 倫 (1/45)
61 孝 (1/8)	62 弟 (2/20)	63 智 仁 勇 (1/119)	
64 誠 (1/92)	65 誠之 (1/18)	66 誠明 (1/78)	67 一 (1/136)
68 止 (1/227)	69 中 (1/87)	70 時中 (1/91)	71 時 (1/152)
72 未発之中 (1/118)		73 和 (1/60)	74 庸 (1/53)
75 正 (1/46)	76 直 (1/86)	77 方 (1/62)	78 忠 (1/98)
79 恕 (1/196)	80 敬 (1/57)	81 恭 欽 齊 莊 肅 (1/96)	
82 静 (2/224)	83 虚 (1/40)	84 実 (2/226)	85 定 (1/32)
86 安 (2/144)	87 楽 (1/139)	88 聡 (1/31)	89 明 (1/53)
90 聖 (1/13)	91 神 (1/26)	92 睿 (1/8)	93 濬哲 (1/55)
94 謀 (1/69)	95 霊 (1/10)	96 覚 (1/16)	97 節 (1/39)
98 密 (1/8)	99 幾 (1/36)	100 復 (1/14)	101 礼楽 (1/41)
102 文章 (1/84)	103 物 (1/88)	104 軌 (1/36)	105 範 (1/29)
106 則 (1/28)	107 体 (1/38)	108 名 (2/105)	109 位 (1/80)
110 分 (1/102)	111 公 (1/12)	112 私 (1/12)	113 理 <sup>15</sup> (1/8)
114 欲 (1/8)	115 義 <sup>16</sup> (1/8)	116 利 (1/8)	117 善 (1/8)
118 悪 (1/8)	119 淑 (1/8)	120 慝 (1/8)	121 良 (1/4)
122 治 (1/8)	123 乱 (2/65)	124 順 (1/62)	125 逆 (1/12)
126 是 (1/4)	127 非 (1/4)	128 得 (1/2)	129 失 (1/2)
130 己 (1/16)	131 意 (1/8)	132 必 (1/8)	133 固 (1/8)

14 第45条は第46条「慮」と同じ字数であり「～者也」という形式も共通である。「思」をどの概念との系列で捉えるかが第44条と異なるのだろう。

15 「理」は第30条と重なるが、ここは「道」等との系列ではなく、「欲」の対概念である。

16 「義」は第52条と重なるが、五常の一つとしての「義」と「義利」の「義」とで区別されている。

134 我 (1/8)      135 克己 (1/27)   136 自欺 (1/24)   137 人 (1/49)  
138 三才 (1/80)   139 三極 (1/30)   140 万物 (1/3)

### 2.3 『字義』の特徴と内容一斑

一覧表に窺われる『字義』の特徴を把握するとともに、内容の一斑を紹介しよう。

まず目立つのは、対象概念の多さである。陳普自身が念頭に置く先行著作と比べてみても、程端蒙『性理字訓』の30条、陳淳『北溪字義』の26門に対して、153条（現存だけでも140条）は圧倒的である。

ただし、これと同程度まで対象概念を拡大した先例は存在する。程若庸の『増広性理字訓』、すなわち程端蒙『性理字訓』を6門183条と大幅に拡張したものである。

程若庸、字達原。休寧の人。咸淳4年（1268）進士。『宋元学案』巻83では饒魯の弟子で呉澄の師という位置づけがなされている。1247年にはすでに湖州安定書院の山長となっており、陳普より先輩である。程端礼（1271-1345）『程氏家塾讀書分年日程』（1335）巻1冒頭で、「八歳未入学之前」の者に程若庸増広の『性理字訓』を読ませることが指示されている<sup>17</sup>など、その字訓はかなりよく知られていた。そして、「2. 補論」でも触れるとおり、陳普自身がこの『増広性理字訓』に接触していた形跡がある。『字義』の著述に対しても何らかの影響を考えることはできるだろう。

しかし、対象概念の拡充においては共通していても、程若庸の著作があくまでも『性理字訓』の体裁を踏襲している一方、陳普が程端蒙とは（そして陳淳とも）異なる分量を目指していた以上、何らか異なる所があるはずである。その差異が端的に現れてくるのが、一つの概念に対する説明の形式あるいは詳しさにおいてである。

『性理字訓』の場合、1概念に対する説明が4~17字、多くが8字でほぼ一定している。8字での説明の一例として、第25・26条の「誼」（義）・「利」を

<sup>17</sup> この部分の訳注として（松野 2006：42-6頁）。

見てみよう。

無為而為、天理所宜、是之謂誼。[目的意識なくして行い、天理に合致していること、これを誼という。]（『程蒙齋性理字訓』：789頁<sup>18</sup>）

有為而為、人欲之私、是之謂利。[目的を遂げようとして行い、人欲にまみれた個別性であること、これを利という。]（同上）

このように、4字句を連ねて簡単に概括したあと、「是之謂○」等のかたちで、その概括が対象概念についての説明であることが表示される。程若庸にも踏襲されるこうした形式の一貫性が『性理字訓』の特徴である。このことから、各概念の十分な説明よりも、直観的把握や暗記に便利なフレーズを提供することに本書の目的があることがわかる。

これに対して、陳淳『北溪字義』は、周知のごとく詳細さにこそ特徴がある。『性理字義詳講』という別書名が言い得て妙なるゆえんである<sup>19</sup>。その説明は、対象概念が他の類似概念とどのように使い分けられ、またどのように関連しているかといった諸側面について委曲を尽くす。個々の条について見れば短文もあるが、それだけでは対象概念の説明は完結せず、他の条の説明も合わせ見ることが前提とされている。

対するに、陳普の『字義』はどうだろうか。各条の平均字数を算出するならば、『性理字訓』と『北溪字義』の中間に位置するであろう。この意味において、自序に語られた「程端蒙よりも多く、陳淳よりも少なく」という陳普自身の狙いは果たされている。

ところが、子細に見ると、陳普『字義』自体の中に長文と短文との両極が見られる。前半は比較的長文が多い（ただし陳淳ほどの長文はない）。いっぽう、後半、とくに第111条「公」以後には短文が集中している。このようになった理由は、自序から推測できる。すなわち、丘和仲への講義にもとづく部分と、それに併せて記されたその他の切要の語という、二つの来源が本書には含

18 『四庫全書存目叢書』子部第4冊のページ数を付す。

19 陳栄捷は陳淳の記述を簡潔と見るが（Chan 1986: p. 12）、従いがたい。

まれているのである。

そこで、『字義』の内容紹介として、長文と短文それぞれの例を挙げることにする。これによって全体の傾向を窺うことができよう。

長文の例としては第2条「太極」を挙げる。「太極」については『遺集』にも関連する詩文が散見され<sup>20</sup>、陳普自身の関心が強かった概念である。

即道也。一物一万物一極至也。理至此止、不可損益、故謂之極。止有此理、無以尚之、故謂之太極。未有天地万物、先有此理、故為天地万物之本、而在天地万物之前。既有天地万物、則凡有定則常分而不可易者、皆太極之體也。故為天地万物之理、而在天地万物之後。又凡有形者、有去來生滅、而其理常在天地間而不息、故常洋洋乎如在其上、而為万物之主也。一物一形、性各有所止也。万物一未動、則衆理已具於全体之中、既生則不同、而實相通。一以貫之是也。[ずばり道である。一物ごとに一つの万物であり一つの極至なのであって、理はそこまで行き着いて止まり、減らすことも増やすこともできないが故に、これを「極」と言う。この理があるばかりで、それを上回るものなどないが故に、これを「太極」と言う。いまだ天地万物がないときから先ずこの理があったので、天地万物の根本として天地万物よりも前に位置する。天地万物が存在して以後は、およそ決まった法則や一定の分際があつて変更不可能なものはすべて、太極の具体化である。それゆえ天地万物の理として天地万物よりも後に位置する。さらに、形あるものには去來生滅があるけれども、その理は常に天地の間にあつて中断などしないが故に、常に広々と広がつて上方にあるが如く、万物の主となるのである。一つの物ごとに一つの形があるのは、性にそれぞれ止まる地点があるのである。万物がひとたびまだ動かない状態となれば、多くの理が全体の中にすでに具わっている。生じて以後は同じではなくなるが、実のところは通じ合っている。「一以て之を貫く」というのがそれだ。]（『字義』太極、『石堂先生遺集』卷9：415頁）

20 「答謝子祥無極太極書」（卷12）、「太極辯序」（卷13）等。

「太極」がそのように名付けられる所以と、その天地万物との先後関係に応じた位置づけが焦点とされている。しかし、表現に明確さが乏しいせいも、訳出したとおりの解釈でよいか確信が持てない。また、後半は「太極」というよりは「理」や「性」についての説明にずれ込んでいるかの如くである。

次に、短文の例として第115・116条の「義」・「利」を見る。

道理当然、以死守之。[道理としてそうあるべきことであり、死を賭して守り抜く。]（『字義』義、『石堂先生遺集』巻9：428頁）

一己之便、害物不顧。[自分一人だけの便宜で、他の物を傷つけても顧慮しない。]（『字義』利、同上）

前引の程端蒙の字訓と比較すると、4字句2句という分量は共通だが、程端蒙は両者の対概念としての性格を表現上でも際立たせるのに対して、陳普の説明は散漫な感を免れない。

もう一例、極端な短文の例として、第128・129条「得」・「失」を挙げておこう。

合理。[理にかなうこと。]（『字義』得、『石堂先生遺集』巻9：429頁）  
迷行。[行いに迷うこと。]（『字義』失、同上）

総じて、陳淳と程端蒙との中間的性格は陳普自身の意図したことではあるが、詳講するわけでもなく、記憶用の簡略さに徹するわけでもない中途半端さをもたらしたといえる。しかも、条によってそのどちらかの性格が表れ、長さがバラバラである。こうした二重の中途半端さが、書物としての統一的な印象形成を阻害した可能性はあるだろう。

## 2. 補論 『石堂先生遺集』巻14所収「性理字訓」の問題

『遺集』には『字義』以外にもう1篇、同類の文章が見出される。巻14所収

の「性理字訓」上・下である。ところが、その内容を見ると、上は程若庸『増広性理字訓』の「造化第一」全24条とほとんど同文、下は同じく「性情第二」全48条のうち第32条「誠」までと重複し、最後に同書にない「思誠」の条が加わって独自の後書きが付される。これはどうしたことか？

いささか想像を巡らせば、陳普は字義・字訓への関心から程若庸の書を手入しており、その最初の2門に特に重要性を認め、改変を施していたものであろうか。程若庸は武夷書院山長を務めたことがある。また、陳普も福建だけでなく現在の江西省にまで講学の足跡を残している。両者の活動範囲には重なり合う部分があったと考えられ、そのどこかで程の影響を受けた可能性もまた想定できよう。

### 3. 後世の受容

余載が伝える「百五十三顆驪珠」との賛辞にもかかわらず、『大明一統志』や『八閩通誌』の伝では『字義』の著について言及されない。閔文振が『遺集』を編纂したとき、すでに完本を得るのは難しく、『遺集』自体も薛孔洵が重刊しなければ消滅しかねなかった<sup>21</sup>。

しかし、『遺集』重刊後も『字義』がそれほど注目されたようには見えなない。天啓3年(1623)刊の選集『選鐫石堂先生遺集』では、『字義』は含まれず、「詠史」を中心とする詩作、『遺集』巻10所収「渾天儀論」などに重点が置かれている。『宋元学案』巻64・『宋元学案補遺』巻64に引く資料にも、『字義』は含まれない。

それでも、少数ながら『字義』が受容された事例が見出せるので、ここに紹介する。

#### 3.1 黄叔瓚撰『広字義』

最初に見るべきは、増補版が作られたことである。すなわち、黄叔瓚<sup>22</sup>撰

21 さらに言えば、薛孔洵重刊の万暦本も、彼の生前には刊行を見ず、その子が私財をなげうってやっと刊行に漕ぎ着けたものである。万暦本の崔世召後序による(『続修四庫全書』影印本には欠)。

22 順天府大興の人。最初の巡台御史(監察御史として台湾の巡察に従事する職)として知られ、『広字義』を含むその学術については(劉2005)参照。

『広字義』2巻であり、孫承沢<sup>23</sup>（1592-1676）が増訂した『字義』をもとに、黄叔瓚が『北溪字義』・『性理字訓』をはじめとした先儒の関連記述を合わせ掲げ、整理したものである。増損の結果、142条となっている。乾隆4年（1739）の尹会一序および李光型（李光地の弟）跋をもつ黄氏刻本の影印が、『四庫全書存目叢書』子部第27冊に収められている。

本書は、増損・拡張の様相自体に清初理学思想の一斑が窺われるであろうという以外にも、孫承沢の識語、黄叔瓚の自序、李光型の跋等からは、書物の流传状況について興味深い情報が得られる。すなわち、蔵書家として知られる孫承沢は、陳普に『字義』の書があることを久しく知りながら、「辛丑」順治15年（1661）になってやっと借覧の機会を得た。また、黄叔瓚の場合、最初に得た字義・字訓の書は孫承沢増訂の『字義』であり<sup>24</sup>、乾隆3年に李光型が贈呈するまでは、陳淳『北溪字義』・程若庸『増広性理字訓』に、未だ接していなかったことなどが読み取れるのである。

### 3.2 和刻本

国立公文書館に、いずれも昌平坂学問所旧蔵に係る、寛文11年（1671）と元禄7年（1694）の刊本が所蔵されている。後者は後印である。本文部分は、四周双辺、無界、白口単黒魚尾、毎半葉11行20字（一部21~22字）、注文双行低2格。寛文刊本は最終第29丁裏の最終行、「閔文振謹誌」の直下に「〔寛文十一辛亥年〕 田原仁左衛門板行」との刊記があり、元禄刊本は行末は空格、下辺を揃えた張出部に「元禄甲戌之春林九兵衛刊」とある。

「洵」すなわち薛孔洵の注が第72条「未発之中」と第83条「実」の2箇所にあるから、底本は万暦本である。字体は万暦本に酷似しており、覆刻かと思われるが、時に小字を大字に改める等の修正、文字送りの変更、字体の変更等も行われている。

長澤規矩也は、それ以前にもう一種の刊本を記して「未見」としている<sup>25</sup>

<sup>23</sup> 順天府大興の人。いわゆる「武臣」の一人である。謝正光がその顧炎武・朱彝尊との交遊を論じ（謝2001：330-91頁）、劉仲華が理学者たちとの交流を論じる（劉2007）。

<sup>24</sup> 孫承沢の没後、その蔵書を入手したのが黄叔瓚の兄・叔琳であったから（謝2001：341頁）、その縁によるものであろう。

(長澤規矩也著・長澤孝三編 2006:106頁)。寛文の刊記が後修と思われることは確かである。

ともあれ、『北溪字義』については長澤書で和刻本7種を数え、現在の諸機関の蔵書数も格段に違う。この盛況と比べると、陳普『字義』への関心は明らかに低調である。

## おわりに

陳普『字義』の内容および受容の状況を概観してきた。調べるほどに、その傍流的性格は覆うべくもない。その一因はテキストの流布を阻害した外的条件にもあろうが、2.3に紹介した内容上の特徴も有力な原因と想像される。すなわち、対象概念の多さと説明形式の二重の中途半端さとが相乗的に作用して、焦点が拡散した嫌いがある。

しかし、傍流ゆえに無価値だと見ることも誤りであろう。すでに形成されてしまった、主流的テキストから成る思想史に対して、こうした傍流的資料は、あり得たかもしれない別の可能性を示唆するものとして意義を有し続けるはずである。少なくとも陳普の主観としては、陳淳および程端蒙による字義解説では十分な教育効果を挙げ得ないと考えられ、それとは異なる字義解説が明確に志向されていた。それゆえ、「『北溪字義』とは朱子の哲学であり、それゆえ、一言でいえば新儒教そのものである」(Chan 1986: p. xii)といった断言を、相対化してみる必要はあるものと思われる。

## 附：『統修四庫全書』影印本の諸本による対校

陳普『字義』について、『統修四庫全書』影印本を諸本により対校した結果を附記する。

第1節に記した刊行経緯から明らかなおおり、『統修四庫全書』が底本とした万暦本に対しては、嘉靖間の版本がオリジナルの位置を占める。また、『統修四庫全書』では影印本の常として、不明あるいは疑問の箇所が散見される。

---

25 なお、同書は撰者名を「陳晉」と誤る。

こうした部分について実物を確認し、また嘉靖間の版本と対校することで、より確実な本文が得られよう。

和刻本は万暦本に依拠しているが、既述のとおり完全に同じというわけではない。

『広字義』の掲げる「原」本文の異同については、参考になりそうな場合のみ指摘する。

記述方法としては、まず対象字句を掲げて万暦本巻9の葉数表裏と行数、続修四庫全書のページ数を付記し、その後に諸本での状況を記す。万暦本実物としては国立公文書館蔵本を用いた。続修四庫全書本と区別すべき場合は「影印」と「実物」等とする。〔 〕は小字双行の部分、／は改行、■は影印不鮮明もしくは翻字困難を示す。字体にかかわるケースは、原則として指摘しない（「変」と「變」、「禮」と「礼」等）。

○字義序（静嘉堂文庫蔵嘉靖A本は巻9第1丁が欠落し、「字義序」が見られない）

- ・「年七七」（1b, 12：414頁）上の「七」、嘉靖B本は「十」に作る。より古い版本であり内容もより自然であるから、従うべきであろう。
- ・「端的淡治」（1b, 15：414頁）「淡」、嘉靖B本・和刻本・広字義は「淡」に作る。従うべきである。
- ・「立的切要等語」（1b, 18：414頁）「立」、和刻本は「端」に作る。
- ・「開析」（1b, 18：414頁）「析」、万暦本では「拆」に見え、和刻本は「拆」に作るが、嘉靖B本・広字義は明瞭に「析」に作る。
- ・「堂而／■」（1b, 110-2a, 11：414-5頁）「■」は影印不鮮明。「室」である。
- ・「吾嘗」（2a, 11：415頁）「嘗」、嘉靖B本・広字義は「當」に作る。
- ・「待矣」（2a, 11：415頁）「待」、和刻本は「得」に作る。

○本文

- ・「〔毎度四百〕／里」（2a, 15-6：415頁）嘉靖A・B本は「里」まで小字双行夾注。従うべきである。和刻本はすべて大字で本文とする。
- ・「理至此止」（3a, 17：415頁）嘉靖A・B本は「止」を「上」に作るが、文

意上は「止」がよい。広字義の該当部分は「止」の字無し。

- ・「無痕無跡」(6a, 1.1 : 417 頁) 嘉靖 A 本は「跡」を「迹」に作る。
- ・「復答我之所答」(7a, 1.9 : 417 頁) 「之」、和刻本は無し。
- ・「〔故為隱也〕」(8b, 1.6 : 418 頁) 嘉靖 A・B 本・和刻本とも 4 字を大字とする。
- ・「即道之二體用也」(9a, 1.2 : 418 頁) 「二」、和刻本は「一」に作る。
- ・「以撿／其形氣之欲」(9b, 1.9-10 : 418 頁) 「撿」、嘉靖 A・B 本・和刻本・広字義とも「檢」に作る。
- ・「無所不敬若／君親之臨乎其上也」(10b, 1.1-2 : 419 頁) 「若」、和刻本は「者」に作る。
- ・「如飢則思」(11a, 1.1 : 419 頁) 嘉靖 A 本は「飢」を「饑」に作る。
- ・「埋具於心」(11a, 1.3 : 419 頁) 影印では「埋」に見えるが、当然「理」である。
- ・「小信矣」(14a, 1.2 : 421 頁) 嘉靖 A・B 本は「矣」の下に「論語與朋友交言而有信之信正指此」15 字あり。
- ・「端頭緒也」(14a, 1.7 : 421 頁) 和刻本は「頭」を「猶」に作る。
- ・「衆月」(14b, 1.1 : 421 頁) 「月」、嘉靖 A・B 本・和刻本・広字義とも「目」に作るのに従うべきである。万暦本は「目」字の下辺がつかない形。
- ・「綱擧而後目張綱正而後月齊」(14b, 1.2 : 421 頁) 嘉靖 A 本のみ一字目の「綱」を「網」に作るが、劣る。「月」については同上。
- ・「國家天下」(14b, 1.2 : 421 頁) 嘉靖 A・B 本は「家國天下」に作る。
- ・「典從冊在才上」(15a, 1.7 : 421 頁) 「才」は影印・実物とも不明瞭。和刻本は明瞭に「才」に作るが、嘉靖 A・B 本が「兀」に作るのに従うべきだろう。広字義は「大」に作る。
- ・「以為■世立教之重器也」(15a, 1.9 : 421 頁) 「■」は万暦本では「禹」に似た奇妙な文字。和刻本は「萬」に作る。嘉靖 A・B 本・広字義は「垂」に作り、従うべきである。
- ・「■數」(15b, 1.10 : 421 頁) 「■」は影印不鮮明だが、「分數」である。

- ・「疵病」（16a, 1.5 : 422 頁） 嘉靖 A 本は「病」の下に「也」1 字あり。
- ・「上」（17b, 1.4 : 422 頁） 万暦本の誤刻。目録、他の諸本とも「止」である。
- ・「止於丘隅」（18a, 1.1 : 423 頁） 嘉靖 A・B 本は「於」を「于」に作る（B 本は「干」に見える）。
- ・「〔答問類〕」（19b, 1.5 : 423 頁） 万暦本固有の薛孔洵注の一部。「問」、和刻本は「問」に作り、従うべきである。
- ・「喜怒哀樂」（19b, 1.8 : 423 頁） 「樂」、和刻本は「悪」に作る。
- ・「憂尚患」（20b, 1.10 : 424 頁） 嘉靖 A・B 本・和刻本ともこの 3 字を「夏尚忠」に作るのに従うべきである。万暦本実物では、「患」は「忠」であった。広字義はこの箇所なし。
- ・「左氏忠於氏」（21a, 1.2 : 424 頁） 下の「氏」、嘉靖 A・B 本・和刻本・広字義とも「民」に作る。
- ・「於義■之當然」（21b, 1.7 : 424 頁） 「■」は影印不鮮明。「理」である。
- ・「敬於持身■／物事上」（22a, 1.1-2 : 425 頁） 「■」は影印不鮮明。「接」である。
- ・「惟理之循則動靜皆靜雖有為／亦若無為也」（22a, 1.7 : 425 頁） 和刻本 2 種いずれも「則」以下「有為」までの 8 字の代わりに「習」1 字あり、その行は以下空格。
- ・「雖乎足不同」（22a, 1.8 : 425 頁） 「乎」、嘉靖 A・B 本・和刻本が「手」に作るのに従うべき。
- ・「若志」（23a, 1.7 : 425 頁） 「志」、嘉靖 B 本は「忘」に作る。
- ・「知有物化」（23b, 1.1 : 425 頁） 嘉靖 A 本・広字義とも「有」を「誘」に作る。『礼記』楽記による表現だから、「誘」が当然よい。
- ・「静而後」（24a, 1.2, 5 : 426 頁） 嘉靖 A・B 本は「後」を「后」に作る。
- ・「文言■則■之」（24b, 1.1 : 426 頁） 影印不鮮明。「樂則行之」である。
- ・「大而化無不通」（25a, 1.4 : 426 頁） 嘉靖 A・B 本は「無不通大而化」に作る。
- ・「■無不見」（25a, 1.9 : 426 頁） 「■」は影印不鮮明。「照」である。
- ・「通幽入微」（25a, 1.9 : 426 頁） 「幽」、和刻本は「微」に作る。

- ・「■以體政」(27b, 1.10 : 427 頁) 「■」は影印不鮮明。「禮」である。
- ・「喜怒哀惡」(29a, 1.1 : 428 頁) 「惡」、和刻本は「樂」に作る。
- ・「喜怒哀惡」(29a, 1.3 : 428 頁) 「惡」、和刻本は「樂」に作る。
- ・「旁招俊义义有治才也」(30a, 1.7 : 429 頁) 両「义」字、嘉靖 A・B 本・広字義は「义」に作る。和刻本は上のみ「义」に作る。
- ・「從作义理」(30b, 1.2 : 429 頁) 「义」、嘉靖 A・B 本・和刻本・広字義とも「义」に作る。
- ・「務〔欲如〕人」(31a, 1.9 : 429 頁) 他の諸本すべて「欲如」とともに大字とする。

○字義後序

- ・「〔翼甫拆人〕」(32b, 1.5 : 430 頁) 「拆」、嘉靖 A・B 本が「浙」に作るのに従うべき。
- ・「味門之輔氏」(32b, 1.5 : 430 頁) 嘉靖 A・B 本・和刻本が「味」を「朱」に作るのに従うべき。
- ・「夜／旦莊誦」(32b, 1.6-7 : 430 頁) 「旦」、和刻本は「且」に作る。
- ・「不知肉朱」(32b, 1.7 : 430 頁) 嘉靖 A・B 本・和刻本が「朱」を「味」に作るのに従うべき。
- ・「■■詳畧」(33a, 1.1 : 430 頁) 2 字影印不鮮明。「安卿」である。
- ・「風胡非乏巨眼」(33a, 1.2 : 430 頁) 「胡」、和刻本は「殊」に作る。

○関文振識語

- ・「為唐■■■」(33b, 1.4 : 430 頁) 3 字影印不鮮明。「盧殷文」である。

## 【文献】

※一次史料（陳普の著作、および字義関係で文中に使用したもののみ挙げる）

〔宋〕程端蒙撰 程若庸補輯『程蒙斎性理字訓』1 卷 『四庫全書存目叢書』子部第 4 冊（北京師範大学図書館蔵清同治至民国間刻西京清麓叢書本）

〔宋〕陳淳著（熊国禎・高流水点校）『北溪字義』、北京・中華書局、1983 年

〔宋〕陳普撰『石堂先生字義』 寛文 11 年印、田原仁左衛門：国立公文書館蔵

〔宋〕陳普撰『石堂先生字義』元禄7年印、林九兵衛：国立公文書館蔵

〔清〕黄叔瓚撰『広字義』2巻『四庫全書存目叢書』子部第27冊（清華大学図書館蔵清乾隆4年黄氏刻本）

〔宋〕陳普撰『石堂先生遺集』22巻 明嘉靖14年序刊本：静嘉堂文庫蔵（→京都大学人文科学研究所には景照本ありとのこと）

〔宋〕陳普撰『石堂先生遺集』22巻 明嘉靖16年序刊本：前田育徳会蔵

〔宋〕陳普撰『石堂先生遺集』22巻『続修四庫全書』第1321冊（拠明万暦3年薛孔洵刻本影印）：国立公文書館蔵の万暦本は林羅山・昌平坂学問所旧蔵、末尾に万暦3年の崔世召撰「重刻石堂陳先生文集後序」あり（続修四庫全書本にはなし）。

〔宋〕陳普撰〔明〕阮光寧選『選鐫石堂先生遺集』4巻『四庫全書存目叢書』集部第20冊（清華大学図書館蔵明天啓3年刻本）

※日本語

長澤規矩也著・長澤孝三編（2006）『和刻本漢籍分類目録 増補補正版』、汲古書院

松野敏之（2006）「『程氏家塾読書分年日程』訳注（三）」、『論叢 アジアの文化と思想』（15）、pp. 41-75.

※中国語

高令印・陳其芳（1986）『福建朱子学』、福州・福建人民出版社

劉仲華（2005）「清代首任巡台御史黄叔瓚生平及其学术成就簡述」、『唐都学刊』21巻6期、pp. 144-8.

劉仲華（2007）「試論清初降臣孫承沢与理学家的学术交往」、『唐都学刊』23巻6期、pp. 87-92.

童生（2003）「大儒石堂先生」、『福建郷土』2003年3期、p. 43.

謝正光（2001）『清初詩文与士人交遊考』、南京・南京大学出版社

張加才（2004）『詮釈与建構——陳淳与朱子学』、北京・人民出版社

張高評（2007）「印刷伝媒与宋代詠史詩之新変——以遺民陳普詠史詩為例」、『文与哲』11期、pp. 313-56.

朱鴻林（2005）『中国近世儒学実質的思辨与習学』、北京・北京大学出版社

※英語

Chan, Wing-tsit. (1986), *Neo-Confucian terms explained*, New York: Columbia University Press

Tucker, John Allen. (1990), *Pei-hsi's Tzu-i and the Rise of Tokugawa Philosophical Lexicography*, Columbia University; University Microfilms International

〔付記〕本稿は2013年度学習院大学外国語教育研究センター研究プロジェクト「中国思想における倫理と功利」（代表者：馬淵昌也）の研究報告の一つであるとともに、JSPS 科研費 24520044（研究代表者：恩田裕正）の助成による研究成果の一部でもある。口頭発表では若干の内容分析をも行ったが、今回は紙幅の都合で資料紹介を中心とした。資料閲覧に関して各所蔵機関に深く感謝申し上げる。